三好和義さんが語る ふるさと・吉野川の魅力

「恵みの宝庫『吉野川』創造プロジェクト」の取り組みのひとつとして、文化・歴史・環境など色々な観点から吉野川にスポットをあてた5回の講座を開催。第2回講座は、徳島市出身の三好和義さんに、写真家ならではの視点から吉野川の魅力をたっぷり語っていただきました。

川島城のほとりにて
川島城から河畔へ。U字に蛇行した川の流れ、青々と繁った竹林、美しい水の色……まさに「絵になる吉野川」。手前に写ったカンドリ舟が川の大きさを演出している。
（撮影／三好和義氏）

吉野川は絵になる 風景がいっぱい

7月28日、徳島県教育会館に於いて、徳島市出身の写真家・三好和義さんを講師に迎え、「まるごと吉野川『魅力再発見』講座」を開催しました。

快活な阿波弁で始まった講座は、三好さん撮影の美しい写真を見ながら、写真を撮った時の話などを語っていただくという形で進みました。

「絵になる景色が徳島にはたくさんある。川の幅が広くて、いろんな景色があるのが吉野川の魅力。また、東西に川がまっすぐに流れているので、朝陽と夕陽の両方が川にきれいに写りこむ。こういう川は全国でも珍しい」と三好さん。

神秘的な雰囲気の源流、雪のかずら橋、雨にけぶる潜水橋、みずみずしい竹林、夕焼けに染まる中流の風景、水音が聞こえてきそうな稚アユの遡上風景……次々とスクリーンに映し出される写真に魅了されます。

ぼくのふるさと 阿波吉野川

好奇心旺盛でヤンチャな三好少年にとって、吉野川は絶好の遊び場でした。カメラを手にするようになってからは吉野川が撮影フィールドに。14歳の時、吉野川で撮影した作品が徳島新聞に掲載されて初めてギャラをもらい、この時、プロの写真家になることを意識されたそうです。

写真家となり、世界中を旅するようになった三好さん。ハワイ、タヒチなど南国の青い空、青い海を撮る時、思い浮かべるのは、いつも不思議と徳島の風景だったとか。それは、生まれ育った徳島駅前ののどかなヤシ並木、藍染めの濃い青の色、そして吉野川でした。

「吉野川ってものすごくきれいな川なんだと気づきました。世界的に見てもすばらしい。きれいな景色というだけじゃない、人の営みがある。深さ、広さがある。徳島でいたらそういうことになかなか気づかないかもしれないね」

源流
高知県本川村白猪谷、深い原生林の森から194kmにもわたる吉野川の旅が始まる。岩の間から湧き出る水をすくって飲んだら「自分の気持ちがカタッと変わったような瞬間があった」と三好さん
（撮影／三好和義氏）

脇町潜水橋
「奥に幾重にも重なった山並みが徳島らしい風景。橋の上を走る自転車が清々しい」。写真集「ぼくのふるさと阿波吉野川」にも収められており、“爽やかな風の道”と表現している。
（撮影／三好和義氏）

歴史やひとの生活を 一枚の写真に織り込む

帰郷するたびに、吉野川に撮影に行くという三好さんにとって、吉野川は自分のスタジオのようなもの。

「何回も、何年にもわたって通ううちに、『この時間なら、この天気なら、あそこがおもしろいんじゃないか』と分かるようになるし、毎回、新しい発見があります」

この日の参加者には三好さんのファンや写真愛好家も多く、そんな人達のためにトークには技術的なアドバイスも盛り込んでくれました。

「同じ場所でも季節や時刻、光のあたり具合、シャッターのタイミングで違った表情になる。歩きまわってポイントを探す。カメラをたてる場所をあれこれ探すこと」また、「人の生活、人の気配を画面の中に入れると、観る人にストーリーを想像させる一枚になる」とも。

生き物達の楽園
吉野川河口は野鳥や昆虫、魚など生き物達の楽園。写真は徳島県の鳥・シラサギ。冠毛やくちばしの黄色、鋭い目つき、羽根の質感までくっきりと写っている。4〜5mまで近づいたのに「エサをとるのに夢中で飛んでいかなかった（笑）」とか。（撮影／三好和義氏）

三好さんが写真を撮るとき、いつも意識しているのは「ひとの心に響く写真を」ということ。例えば、脇町のうだつの町並みなら、町の歴史、そこで栄えた文化などを写真の中にどう表現するか。例えば、道なき道を何時間もトレッキングしてたどり着いた吉野川の源流。原生林の森の中から大河の源が始まることの意味を、観る人にどう伝えるか——。

この日紹介してくださった中に、桂離宮で撮ったという美しい青石の写真がありました。

「徳島の山から運ばれたものではないかな？　徳島でいたら青石なんて当たり前のように見ているけど、場所をかえて見たらその良さに気づく、そういうことってある。今日見てもらった写真で『いつも見ている景色の中にこんなきれいな風景があるんだ』って、気持ちのどこかにそういうのを置いといてもらえると、気持ちが豊かになるっていうんかな？……目の前の景色を新鮮な気持ちで観られるようになると思います」

—— Miyoshi Kazuyoshi ——
1958年徳島市生まれ。’85年に出版した初の写真集「RAKUEN」で木村伊兵衛賞を最年少（当時）で受賞。以降、「楽園」をテーマに、タヒチ、モルディブ、沖縄、ハワイをはじめ世界各地で撮影。その後も南国だけでなく、サハラ、ヒマラヤ、チベットなどにも楽園を求めて撮影。その多くは写真集として出版されている。’98年には日本ユネスコ協会の依頼で「日本の世界遺産」を撮影。この作品は国際交流基金により世界中を巡回中。近年は伊勢神宮、屋久島、京都御所、桂離宮など日本での撮影も多い。2013年には20年に一度の伊勢神宮の式年遷宮を撮影、11月に銀座・和光ホールで写真展を開催した。

「ぼくのふるさと阿波吉野川」
源流から、三好さんが生まれ育った徳島市の河口までの写真を、川の流れに沿って構成。徳島の人“だから”知らない吉野川の風景に出会えるかもしれません。
1998年発行。小学館刊／4,300円（本体価格）